

# 日本語教育における文化教育の重み

秦 明 吾

---

## キー・ワード

中国 (China)

日本語教育 (Japanese language teaching methods)

文化背景 (Cultural background)

企業文化 (Corporate culture)

日本語の心 (Japanese mentality)

## はじめに

新中国の日本語教育が本格的に発展したのは、国の改革・開放政策（1978年）が始まってからのことだと言えよう。1972年の中日両国の国交正常化と1978年の中日友好条約の調印によって、両国の各分野での交流がすさまじい勢いで行われてきた。日本語が少しでも分かれば、いい就職が出来るという市場ニーズに応じて、日本語学習ブームがかなり長く続いていた。80年代の10年間は中国の歴史にない日本語教育の大発展時期だと言っても過言ではないと思われる。90年代に入って、中国の日本語教育が引き続き発展し、日本語は英語に次ぐ第2の外国語となり、日本語学科のある国・公立大学は100校ほどにまで伸びている。日本語教育の発展と深化にしたがって、日本語教

育は質的に向上してきている。1990年代は、中国の日本語教育の成長期、ひいては成熟期だともいうべき時期を迎えてきている。当然ながら、日本語の発音・語彙・文法という言語の3要素を形式的に重要視していることから、日本語教育の中で文化的要素、殊に、言語の文化的背景を日本語教育の中に織り込み、取り入れるべきだ、つまり、どのように生きた日本語を教えるかということに気付いている段階にまでなっている。

## 1 文化とは

日本の1部分の外国人向けの日本語会話や、外国のある日本語会話のテキストの中には、次のような会話のくだりがある。

甲：こんにちは。お元気ですか。

乙：こんにちは。元気です。おかげさまで。あなたは。

甲：ありがとう。私も元気です。

上の会話文は文法上からは何の間違いもないし、文体上からも失礼なところはない。しかし、恐らく日本人同士ではふつう絶対に交わさない会話であろう。これはつまりよく言うところの「日本人の言わない日本語」である。日本人の言わない日本語をどうして教えるかと調べてみたら、それは次の英語の会話から直訳したものだと分かる。

A : Hi ! How are you ?

B : Hi ! I'm fine. Thank you. And you ?

A : I'm fine, too. Thanks.

なるほどと言わざるを得ない。英語を習う日本人になら、しょうがないかもしれないが、日本語を習う外国人に、日本人の言わない日本語を教えるとは何のためなのか。よく考えてみると、言語は決して言語そのものだけではない。言語の中には文化があり、言語の一つ一つの言葉にはその言語を操る人々のものの考え方や発想法、または文化的背景が存在する。英語圏の人たちにとっては当たり前の表現だが、そのままの直訳の日本語表現は、日本で

は通じない。これはつまりカルチャーショックで、文化衝突である。角度が違うが、日本のある中国語学習者向けのテキストの中に、次の会話がある。

甲：您好，今天天气真好啊！（こんにちは。今日はいいい天気ですね。）

乙：嗯，真舒服的天气呀！（そうですね。気持ちのいい日ですね。）

日本人同士で、会った時のあいさつとしては、よく天気のことをしゃべるが、それにはいろいろな説があるようだ。自然に敏感で、自然と一体になって、調和しているとか、相手を困らせたり、刺激したりするような質問を避けるための思いやりのある会話だという。しかし、日本ではいくら自然な会話であっても、中国ではどうかというと、必ずしもそうではない。中国人同士で会った時、天気の話はまず言わないだろう。中国人の庶民同士で会った時のあいさつことばには、よく「您吃了吗（食事は済みましたか）？」と言うのがあるが、これには、中国昔からの「民，食を天とす」という思想による原因とか、昔は口を糊するのはいかに難しいことかという背景があるとされている。中国人のこのあいさつ言葉をそのまま日本に持ってくると、次のような2つのパターンがあるようだ。

パターン1（肯定的な答えの場合）

甲：食事は済みましたか。

乙：ええ。さっき。

甲：それは残念。まだだったら一緒に食べに行こうと誘うつもりだったんですよ。

パターン2（否定的な答えの場合）

甲：食事は済みましたか。

乙：いいえ、まだです。

甲：ちょうどよかった。一緒に行きませんか。

だが、中国人の「食事は済みましたか」という言い方は、ただのあいさつ言葉だけで、相手を食事に誘うという意味合いなどは毛頭ないのである。

国際化時代がすでにやってきている今日、外国語教育の重要性と緊迫性は言うまでもない。外国語らしい外国語を身につけるには、その国の文化をよ

く理解しておく必要がかなりあると思う。

では、文化とはいったいどんなものかという、簡単には答えられないだろう。文学や芸術も文化だし、日本独特の茶道も生け花も、また大相撲も日本文化の範疇にももちろん入っている。ふだんよく聞こえるのは、言語文化とか、大陸文化、海洋文化、ひいては食事文化（魚食文化、寿司文化、酒文化）、服飾文化（浴衣文化）までもある。文化の定義は数えられないほどある。《広辞苑》の説明では、文化は、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果、衣食住をはじめ、技術・学問・芸術・道德・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。」（新村 出編・第5版）と書かれている。また中根千枝氏の定義によれば、文化とは、人間の作り出したものすべてを含む。物質文化・芸術・宗教ばかりでなく、一般にはちょっと思い付かないような、あるいは簡単にイメージ化できないような、言語とか社会組織・知識、そしてまた経済・政治などももちろん入っているのである。

## 2 文化と言語との関係

### 2-1 日本文化

上に述べたように、文化というのは実に幅広い内包と外延を持つものである。ある意味では人間の見えるもの、読むもの、聞こえること、しゃべること、感じることなど、すべて文化と言えないものはないようだ。それでは、外国語を習う人、具体的に、日本語を習う人、日本語学習者は日本のありとあらゆるものを学ばなければならなくなるではないか。それが出来れば何よりであるが、事実上それが出来ないのに近い。外国人どころか、日本に生まれ、日本で育った生粋の日本人でも、日本文化のすべてが理解でき、把握できる人は多分そう多くないだろう。おそらく日本国会図書館の蔵書を全部読み、全て理解し、把握できる人は1人もいないだろう。まして、日本文化は国会図書館の蔵書に限るものではない。外国人の日本語学習者の日本語学習はほとんど時間的に制限があるので、日本文化の一部、つまり日本語学

習になくてはならないもの、日本語学習に役立つもの、言い換えれば、入れる力が半分で倍の効果のあるものしか学ばないのである。

では、努力は半分で倍の効果のあるものって、どういうものなのか、日本語学習者の近道はどこにあるか、について探らなければならない。この問題は簡単ではないと思われる。まず学習者はどこで、何の目的で、どのぐらいの時間を投入するかということによって、多少異なると思う。例えば、中国の国内の大学で4年間勉強して、日本の会社や企業などで就職したいのなら、日本の企業文化、少なくとも、会社での電話のかけ方、電話をかける時の日本語表現、またその時のマナーや礼儀作法など身につけなければならない。

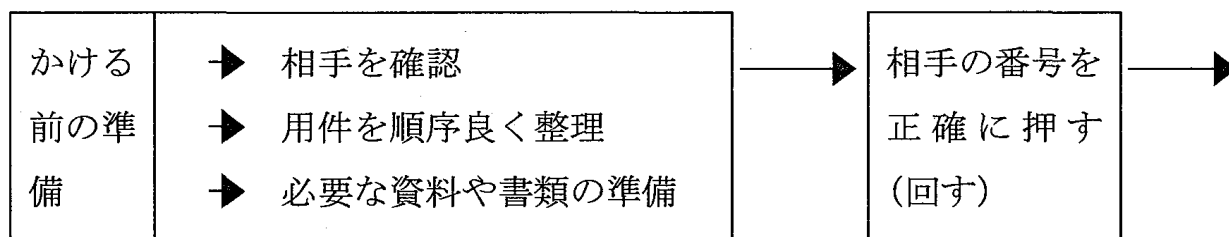
## 2-2 企業文化の1例

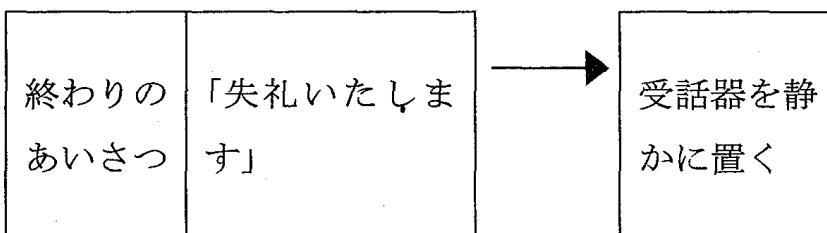
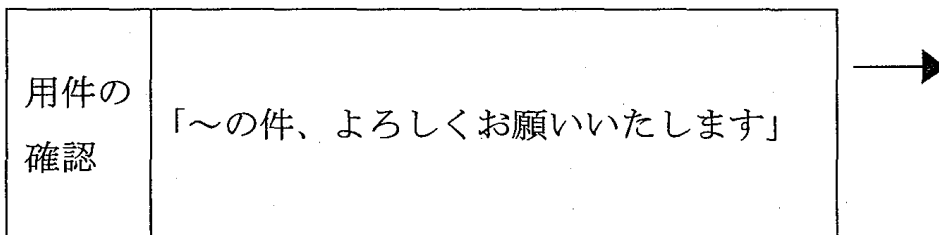
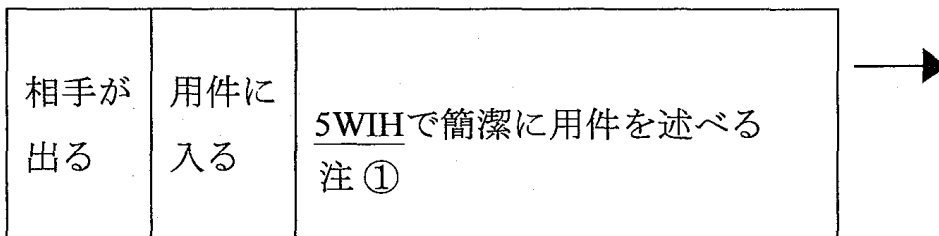
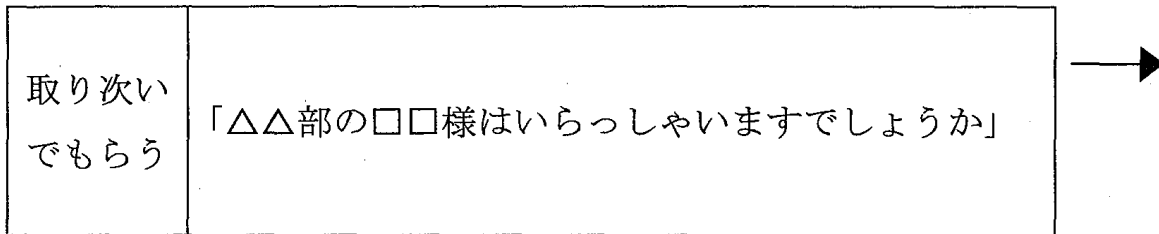
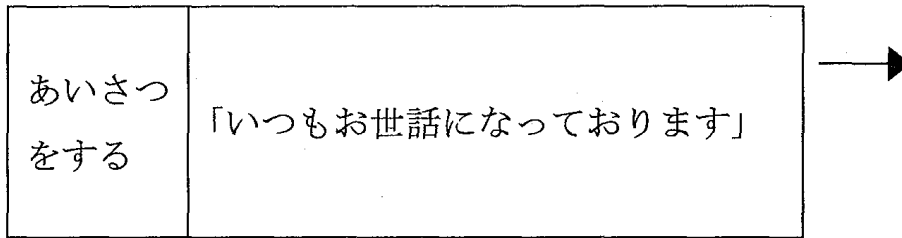
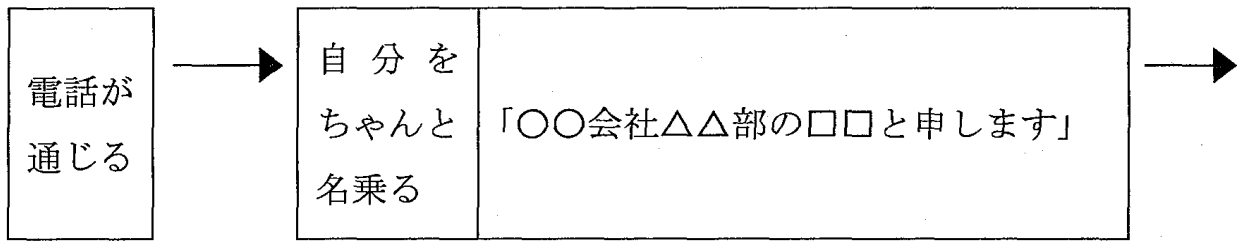
次はビジネス電話に関する日本語表現と対応の仕方、およびその時、守らなければならないマナーや礼儀作法の一例である（NEC 北京駐在事務所による）。

外線電話の場合、なるべく電話のベルが2ベル以内で受話器を取ること、3ベル以上だと、待たせることになるから失礼になる。受話器をとってからいち早く「はい、〇〇会社□□部でございます」と名乗る。絶対に「もしもし」を使ってはならない。「もしもし」は、この場合に使うと、きついので、あたたかい対応法にはならないのである。そして、電話を受けると、左手で受話器を取り、右手は必ず用件記録用のペンを握って、いつでもメモを取る用意を整えなくてはならない。電話をする時の態度も言葉づかいと同じように肝心である。見えないからといって油断などは禁物。お辞儀をすべき時は先方が目の前にいるのと同じようにお辞儀をすること。そういうしぐさそのものが受け答えの一部となっている。相手が目の前にいないと思って、お辞儀をしなくてもいいというわけにはいかない。不思議なことに、いくらきれいな日本語を使っても、お辞儀をすべき時にはせずにしたら、丁寧でない態度がそのまま相手に伝わるそうで、相手にはちゃんと感じられるという。

相手が名乗ったら、「△△会社の××様ですね。いつもお世話になっており

ます」とあいさつする。名指し人が在席している場合、「〇〇でございますね。少々お待ちくださいませ」と言って「保留」のキーを押す。（この時、敬語の内と外の関係で、同じ会社の人の名前の後ろには「さん」づけをしないし、「でいらっしゃいますね」という尊敬表現も使ってはいけない。仮に自分の上司であっても。）そして、「〇〇さん、△△会社の××様からお電話が入っています」と取り次ぐ。取り次ぐ電話はできるだけ30秒以内に。名指し人が電話中の場合、「申し訳ございません。〇〇はただ今電話中ですので、しばらく待っていただけませんか。」と説明して待ってもらう。電話が長引きそうな時は、「お待たせして申し訳ございません。長くなりそうですので、折り返しこちらからご連絡いたしましょうか」または「よろしければ、私が代わりにご用件を伺いますか」と相手にすまない気持ちを伝え、解決法を提案する。名指し人が席を外している場合、「申し訳ございません。〇〇はただ今席を外しております」と事情を説明して、戻る時間が分かる時、戻る時間を伝えること。と同時に、「いかがいたしましょうか。戻りましたら、こちらから折り返しご連絡いたしましょうか」または「よろしければ、私が代わりにご用件をうかがいますか」と臨機応変な対応をする。用件を代わりにうかがう時、必ず正確で間違いないようにメモを取る。そして、「××××、××××、△△会社の〇〇様でいらっしゃいますね。私、〇〇と申します。□□の件、●●に申し伝えます」と用件を復唱したり確認したりして相手を安心させる。最後に、「失礼いたします」とあいさつをして、受話器を静かに置く。こちらから電話をかける時、次の手順ですること。





電話の切り方だが、原則として、かけた方から切る。ただし、先方が客先などの場合は先方が切るのを確認して切る。

会社の電話は顔の见えない会社の窓口であり、話し方一つで相手の心証を左右するし、親切・丁寧・簡潔・正確な対応をしないと、会社の利益に関わることになる。

### 2-3 言語と言語文化

限られた時間に、1番役立つ日本語を習得するには、まず言語文化を習うべきだ。言語と文化には切っても切れない内在的なつながりがある。文化は言語を作る。言語はまた文化を作る。1つ1つの言葉にはその国、その民族の特別な文化的背景がある。その国、その民族の人々のものの考え方、発想法、習慣、つまり、心的文化、精神的文化が内包されている。同じように、特定の民族のものの考え方、発想法、習慣と行動様式などの心的文化、精神的文化といった無形文化によって、新しい特定の言葉が作られる。言語はある事柄を表わす。それは狭義の言語であり、さらに、態度やボディー・ランゲージを加えたものこそ広義の言語なのである。それを大きく包んだものがその言語の置かれる地域社会という背景であり、文化的習慣である。日本語教育においては、文化のパターンで教えるほうがより完全な語学教育ができるだろうと思われる。要するに、言語を教えるには、言語の文化的背景、その言葉を使う雰囲気、ムード、それに、その言語を操る人たちのものの考え方、つまり、思考法と発想法をよく理解し、身につける必要がある。そうでないと、教えた日本語は死んだ日本語であり、あるいは、日本人の使わない日本語、役に立たない日本語になってしまう。

### 2-4 生活環境と言語

生活の自然環境はその環境で生活している人たちの言語文化に大きな影響がある。日本は南北の細長い島国で、亜熱帯から亜寒帯にわたり、複雑な地形や海流の影響で、四季の区別がはっきりしている。そして、自然の変化に



敏感で、自然を尊び、自然に溶け込むように努める。道端で会ったときの天気に関する会話もある意味でその現れであろう。故に、自然に関する語彙が豊富そのものである。「雨男」とか「雨女」とかいった日本語特有の言葉が中国語にはなかなかうまく訳せないのもその原因であろう。中国も海岸線が長い、しかし、昔から文化の中心は大陸の奥部にあり、どちらかという、大陸文化や農業、牧畜文化であるのに対して、日本は海洋文化とか稲作文化といわれる。中国の昔の《魏志倭人伝》には、日本を紹介して、「牛馬虎豹羊鵠その地になし」と言っている。時々学生に聞かれて説明に困るが、中国から日本に伝わっている生まれ年を示す12種類の動物には、11種類は同じだが、1つだけは違う。中国では「亥猪」の「猪」は豚のことだが、日本では猪のことである。猪の年になると、中国では、かわいらしい肥えた豚の縁起動物の絵がいたるところで見られるが、日本では、猪の絵で表わす。これも、日本に伝わった当時、まだ飼育のぶたがなく、たくさんあった豚の原種の猪で代用されたのではないかと思われる。

特定の文化でその文化にふさわしい語彙や表現が生まれる。日本は昔から魚食文化なので、魚に関する語彙や表現が豊かである。それに対して、同じ意味のことを中国では牧畜で表わすことが多い。「鯛」は日本ではめでたい魚とされていて、値段が高い。日本人の方に、なぜ高いかと聞いたら、異口同音でめでたいからだと答える。国語大辞典を開いてみたら、「姿が美しく美味なので、日本料理では魚の王として重用し、めでたいに通じることから、古くから祝いの料理に供する」と説明されている。なるほどと言わざるを得ない。日本では高いが、ほかの国ではどうかというと、必ずしもそうではない。数年前に、家内と一緒に北京の魚市場に行ったことを覚えているが、店頭に並べられている鯛はその他の多くの魚より値段が安いのに、買う人が余りいない。中国では馴染みのない魚なのだから。中国の北方ではずっと前からグチや太刀魚、ここ数年前からサーモン（刺し身にして食べるのが普通）がよく知られている。日本語の鯛に関する慣用語だが、「腐っても鯛」の中国語は「瘦死的骆驼比马大」である。その中国語を日本語に直訳すれば、「飢え死に

したラクダも馬より大きい」になる。「タイの尾より鯛の頭」の中国語は「宁为鸡头，不做牛尾」で、日本語の「タイ」は中国語では「牛」であり、日本語の鯛は、中国語では「鶏」で表わしている。また、「海老で鯛を釣る」の中国語訳は、全然水産物や動物と関係の無い物で例えられており、「抛砖引玉」である。それを日本語に直訳すれば、「煉瓦を抛って玉を引く」である。つまり、煉瓦で玉を釣るのである。日本では、海老よりタイの方が高価的であるが、中国ではタイよりむしろ海老の方が上等で高い。昔から、煉瓦造りの家が中国の伝統的な住まいなので、煉瓦がありふれたものである。「玉」はここでは「ぎょく」と読んで、一種の宝石みたいな石で、緑の色である。よくアクセサリーや高級な工芸品に加工され、昔、皇帝や皇族、または貴族たちに愛用されていた。日本の「海老でタイを釣る」は、中国語の安物の「煉瓦」で高価な「玉」を釣ることになるのである。それから、「魚の目」というのは、足の裏の、豆大で黄色い円形状のものなので、いかにも魚の目のように見えるが、中国語では、「鶏眼」と言って、「鶏の眼」で表わしている。考えてみたら、確かに鶏の目のようにも見えるわけなのである。

意識やものの考え方が民族によって違う。それを数詞に表わすことも多い。中国では「2」という偶数はめでたくて、縁起がよい。「2」は、「双」と「対」とも言って、これもめでたいとされている。人間が結婚することは、1人から2人になるわけだから、結婚する日は、「単」という「1」の意味の表現の入った言葉などは、最も忌み避けるべきである。それは、いつかは物別れになって、1人っぽちになってしまうというような不吉な意味合いが含まれているからである。2人でいつまでも一緒に幸せな生活をするようにという意味の宿った「双」と「対」が最も喜ばれる。家の飾りにも「双」か「対」のものが多し、新婚夫婦に贈ったものは必ず対になっているものでないといけない。その影響か、誰かに（全然その考えのない外国人にまで）おみやげを贈るときでも、なんとなく対物、同じ物2個を贈った方が好都合のようである。もちろん結婚する日も、偶数の日（旧暦の暦で選ぶことが多い）でなければならない。やはり同じ考えである。日本では、奇数の「4」は「死」の

発音と同じで、「9」は「苦」の発音と同じなので、不吉だとされている。しかし、中国では「4」は「6」と「8」と並べてめでたい数字である。中国語では、「4」は「事」と発音が似ているので、「44」は、縁起のよい慣用語「事事如意」（万事うまくいく）になる。「66」は「六六大順」で、順風満帆の意味合いを示す。何か会社や事業の発足、地下鉄と道路などの竣工式或いはオープンによく16日の日を選び、「16」は「一路」と発音が近いので、「一路顺风」という慣用語に通じる。はじめから順風満帆だという意味合いなのである。「8」の広東語の発音と「発」の発音と近い。「発」は「発財」（儲ける）に通じるから、めでたくなる。これは広東から大陸全土に広がった言い方だと言われている。面白いことに、方言の広東語でも開放政策の恩恵で広東の経済が非常によく発展しているおかげで、一部の表現は全国に広がっている。今の中国では「8」は最も喜ばれる数字となっている。「888」は「発発発」で、3つの発の繰り返しなので、大いに儲ける。「1688」の中国語の読み方では「一路発発」で、はじめからうまくいって、いつまでも繁盛でぼろ儲けになるという。電話や車など、「6」や「8」の多い番号を手に入れるのはかなり難しい。場合によっては競売で決まる。特に車ナンバーは、「1688」とか「16888」などの数字だと、みんなから注目され、羨まれる。競売で、人民幣10万元を払って、その番号を手に入れた人があるという。今年の8月22日の《北京晩報》という北京地区の夕刊の報道であるが、高という方が、人民元千元を払って、「1301111818」という全世界のどこへもかけられる携帯電話の縁起番号を手に入れた。「130」は、電話局の共通番号で、「1」は、中国語の発音では「要」と近いから、「1111」は「要要要要」になる。次は「8」、つまり「発」（儲ける）なので、「要要要要発」、つまり、必ず儲けるという意味になる。そのあとに、「18」つまり「要発」なので、「必ず儲ける」の更なる強調になる。日本語で訳すと、必ず、間違いなく、きっと、問題なく大もうけ出来るというたいへん縁起のよい番号である。ところが、最近電話会社が能率を上げるため、今までのいくつものお問い合わせ番号を全部やめて、1つだけの「1301101818」という縁起のよい問い合わせの番号を開通し、公表した。24

時間サービスの唯一のお問い合わせの番号なので、その忙しさといったらない。高という方の電話と1桁だけの違いだから、間違い電話がひっきりなしに、時には夜中の1時や2時ごろも殺到してくる。中国では、携帯はかける方も、受ける方も通話料の半々を負担することになっているため、天文数字の電話料金の請求が来る。ひどい目に合わされて、電話会社に苦情を言ったが、解決出来ないでいる。新聞を通して、苦情を訴えている。報道のみだしは「携帯電話の縁起番号による悩み」である。

20 数年前のことだが、中国へ来たある日本人の世話をして、別れる前に、5 円玉を贈られた。お金、そしてたったの 5 円だけのお金なんか、人を侮辱するじゃないかと思ったが、相手の易しくて微笑んだ表情から決して悪意ではないだろうと確信し、いただいた。後で分かったが、「5 円」は「ご縁」で、あなたと御縁があるよというかなりの好意の表示である。「15 円」は「充分ご縁」で、「45 円」は「始終ご縁」だという。

電話番号を覚えるには、人によってそれぞれの秘訣がある。日本語の数字には、アラビア数字の発音のほかに、「ヒ、フ、ミ、ヨ…」という訓読みの発音もあるので、電話番号などの番号を覚えるのに好都合である。電車やチラシなどのコマーシャルでは、自分の電話を覚えさせるように、いろんな工夫があるのがわかる。記憶の連想法や暗示法などいかに巧みに使われているかが伺える。番号の上に、さまざまなルビや文字が書かれている。そのルビや文字の表わす意味が面白くて、覚えたくなくても1目で覚えてしまうのが多い。場合によっては、売ろうとする商品の性質とその良さ、時にはその品物の特徴までアピールすることができる。例えば、

- |   |   |   |   |   |   |    |     |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|----|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | フ | リ | ー | ダ | イ | ヤ  | ル   |   | ゼ | ロ | 4 | コ | の | ハ | イ |
| ① | 0 | 1 | 2 | 0 | — | 0  | 0   | 0 | — | 0 | 8 | 1 |   |   |   |
|   |   |   |   |   |   | サン | キュウ |   |   | お | や | す | い |   |   |
| ② | 0 | 1 | 2 | 0 | — | 3  | 9   | — | 0 | 8 | 3 | 1 |   |   |   |
|   |   |   |   |   |   | サ  | レ   | ヨ |   |   | ニ | オ | イ |   |   |
| ③ | 0 | 1 | 2 | 0 | — | 3  | 0   | 4 | — | 2 | 0 | 1 |   |   |   |
|   |   |   |   |   |   | シ  | ミ   |   | ヨ | ゴ | レ | ワ |   |   |   |
| ④ | 0 | 1 | 2 | 0 | — | 4  | 3   | — | 4 | 5 | 0 | 8 |   |   |   |
|   |   |   |   |   |   | し  | ん   | み | に |   | し | ど | う |   |   |
| ⑤ | 0 | 1 | 2 | 0 | — | 4  | 3   | 2 | — | 4 | 1 | 0 |   |   |   |

以上の6つの電話番号はいずれもフリーダイヤルなので、全国统一のしる

しと統一の「0120」という番号が誰にも分かり、わざと覚える必要はない。①の「ゼロ4コのハイ」の「ゼロ4コ」は覚えやすく、「ハイ」は「8」と「1」のアラビア数字の発音に近く、そして応答語の「ハイ」とかけているのでやはり覚えやすい。「ゼロ4コのハイ」は、意味合いの上から考えると滑稽で、それを見ると思わず吹き出してしまう。②の「サンキュウ おやすい」の「サンキュウ」は、「3」と「9」の発音で、カタカナで書くと、「ありがとう」という英語の意味にもなり、本当によい工夫である。「おやすい」は英語のアルファベット「O」の発音と「8」の訓読みと「31」のアラビア数字の近い発音である。買得の品物を買うと、いかにも嬉しそうで、得をした表情で他の人にしゃべっている奥さんの姿が浮かんでくるような気がする。また、「おやすい」から「サンキュウ」するわけだから、因果関係があるのも面白い。③～⑤は、覚えやすいような工夫があるだけでなく、宣伝しようとするものまで分らせるような努力をしている。③の「サレヨ ニオイ」は、擬人化の手法で、いやな匂いが早く退去するように「去る」の命令形を使っている。すぐ匂い関係の化粧品や薬かと連想させる。ワキガの汗と匂いの悩み相談の電話なのである。④の「シミ ヨゴレワ」は、③の命令式の口調とは違って、1人ごとを言うような手法である。「しみ 汚れわ」なので、やはり洗剤や清浄器または浄水器を連想させる。⑤の「しんみに しどう」のルビは、珍しく平仮名で打たれているから、意味合いで理解するようにという意図があるだろう。「しんみに」は、肉親のように真心のこもった心遣いをすることから、「親切に指導」という意味が一目で分かる。家庭教師派遣センターの電話なのである。日本語の番号暗誦の好都合に比べると、中国語にもやはり語呂合わせや地口という記憶法があるが、日本語のように好都合ではないようである。聞くとところによると、三菱は北京に事務所を設けたとき、多くの金を支払って、もともと他人の「3030」という電話番号（調べてみたら確かに今でも同じ電話番号を使っている）を買って、事務室の番号にしたそうである。「3030」の中国語の発音は「三菱三菱」の中国語の発音と全く同じなのである。

中国の日本語学習者は、普通、初級段階では数詞を習うが、中日両言語の数詞に関する文化的、または習慣的な違いを、生き生きとした例を挙げながら説明すると、記憶するのに役立てると同時に、これから日本人とコミュニケーションを行い、付き合うとき、支障をなくし、円滑にすることができるようになる。逆に、文化的背景がわからないと、いくら正しい発音で、いくらかわいらしい声で、いくら文法的な間違いがなくても、話し手の表現しようとする情報がきちんと聞き手に伝わらないし、場合によっては、思いがけない誤解が生じるかもしれない。相手の機嫌を悪くしたのに、分かるどころか、好意的だと思い込む恐れがある。そんなに大袈裟でなくても、話者の意図とのずれが生じるのは避けられないだろう。文法的に全く間違いがないが、何かの不自然さを感じる。言いたいことは分かるが、普通の日本人ならそうは言わない。言い換えれば、役立たない日本語を学び、時間を無駄にするのである。

## 2-5 日本語の心

日本の言語文化は、よく「察し文化」とか「思いやり文化」とか言われる。英語や中国語と違って、そんなに明白に言わなくとも、自然に推察出来る。いわゆる「以心伝心」である。はっきり言い過ぎると、ある程度の含蓄がないと、かえって相手を刺激し、スムーズにコミュニケーションを行うことができなくなる。日本人の話には建前と本音がある。日本語は曖昧的で、不明確的だ。日本人は単刀直入な物言いを避けるなど言われたのは、みんなそのためである。日本語のこんな特徴は、日本語を操る日本人のものの考え方によるもので、なるべく相手を傷つけないですむという発想法によるものである。だから、日本語を教えるとき、日本人はどんな人間なのかを教えるのがいかに大事であるかが分かる。

「ちょっと」という日本人の日常的によく使う言葉を日本語学習者に教えるとき、「しばらく、少し」という意味を教えはじめるのが普通である。日常的に使う頻度の非常に高い言葉だから、日本人のよく使う「気配り」を表わす

意味（辞書にはふつうのっていない）を教えておかないと、しばしば問題が生じてくる。次は大森和夫氏ら編著の《日本語》（下）からの引用である。ある日本人が2年ほど日本を離れていて、帰国してすぐ、果物屋で戸惑ったことがあったそうだ。「アボガドありますか」と聞いたら、「ちょっとありません」と言われたので、「いつ入りますか」と聞き返すと、また、「ちょっとないんです」と言われた。そこで、「今、しばらくないんでしょう？」と言うと、「うちはアボガドは置いてありません！」と怒られてしまったということである。つまり、この時の「ちょっと」というのは「しばらく、少し」という意味ではなかったのだ。2年のブランクで日本語の感覚もだいぶ錆び付いたようだ。日本人でさえこういう調子だから、日本語学習者にとっては、こういう表現を理解することはたいへんである。

「田中さんはいらっしゃいますか」「今日はちょっともう退社してしまっただんですが」

「これ、何とか10日ごろまでにお願いしたいのですが」「10日ごろまでにはちょっと無理です」

これらの場合も、「少し退社した」「少し無理だ」というのではなく、「もう退社した」「それは無理だ」と明言することを避けているわけである。このような使い方の「ちょっと」は、相手が期待している答えではないと思われることを言うときによく使うもので、「残念ですが」ということを適当に遠慮がちに言うことで相手が察してくれることを期待する言い方である。

以上のような、婉曲的で、または曖昧な表現はまだたくさんある。「～だあろう。～かもしれない。～にちがいない。～ようだ（みたいだ）。～らしい。～そうだ（様態助動詞）。～はずだ。～と思う。～と思われる。～と言える。～と見られる。～と思えてならない。～と伺える。～（の／ん）ではないか（と思う）。～ではないかとも思う。～ですが。～ですけれども。」はいずれもそのような表現である。

このように、日本人は人の話を聞く場合は、話す人の気持ちを理解しようと聞く。と同時に、話す側の人も考え考えしながら話す。日本語では主観的

認知の表現について英語や中国語にはあまり見られないような細かな配慮をすることがある。そして断定的な言い方を避けることによって、異なる意見も受け入れようとする態度を表わすことが日本人のコミュニケーション文化である。意見の対立を明確にすることをあまり好まないという傾向が日本の文化にあることを考える必要がある。

日本人は外来文化を積極的に取り入れる人種である。外来文化を導入するには、言葉を通じないとできない。昔は漢字文化、今は西洋語、特に英語文化を取り入れている。言語はまた、時代とともに変化するものである。外国人の日本語教師としての私には、しばしば困惑することがある。たとえば、「ら抜き言葉」である。「見られる」「着られる」「起きられる」「食べられる」という可能表現を、「見れる」「着れる」「起きれる」「食べれる」と言う日本人は決して若者だけではない。中年や老年のかたの一部も使うようになっていようである。しかし、日本の言語管轄の権威部門の「国語審議会」が依然として、認めていない。国際交流基金などの日本語検定試験では、やはりそれを間違いだと扱っている。中国の日本語学習者にはやはり「見られるような形態を教えると同時に「見れる」のような形態も教えるよりほかはない。

若者は最も活力的で、言語文化の最前線で活躍しており、新しい言葉の多くは若者によって造られ、使われている。「ら抜き言葉」もそうだし、やや品位度の足りない「やばい」とか「マジ」とかもそうである。日本語教育を担当している人はその点に十分注意する必要がある。しかし、若者の一部こそ、従来伝承されてきた伝統文化、例えば、礼儀作法や躄などを守らないのである。その現れとして、若い女性が車内・人前で飲食・化粧をしたり、男言葉を使ったり、女子高校生が駅のような公共の場で、ルーズソックスに穿きかえたりする。私の勤めている北京の大学には、かなりの日本人留学生がいる。日本語を習っている中国人学生と「ランゲージ・パートナー」をよく作って、お互いに相手の言葉、つまり日本語か、または中国語を習いあう。授業では非常に丁寧な言葉を、例えば、「です・ます体」の表現とか、敬語など教えるが、日本人の若者と付き合ってから、見る見るうちに言葉づかいが荒くなっ



てしまう。それどころか、疑わしそうな表情で、「先生が教えている日本語は日本人の使っている日本語とは違う」とまで言う。わけを聞いたら、「だって、日本人留学生たちはみんなそういうふうに言わないんだ」と弁解する。

### 3 日本語教育への日本文化の導入

前にも述べたように、文化は広い範疇のものである。日本語学習者はすべて学び取り、理解出来れば何よりであるが、限られた時間では無理である。中国の大学では、母国語で日本事情や日本文化、特に有形文化を教授する大学が多いが、それは良いと思う。日本語の授業では、日本語という言語を講義するとき、日本語という言語文化、特に日本語の特別なところ、日本語に隠れている日本文化と文化的背景、その言葉を使う場合の特別なムード、特別な注意点、言い換えれば、日本語の心、日本人の心を教えなければならないと思う。例えば、日本人のよく言う「では、ぼつぼつ出かけましょうか」という言葉を教えるとき、その「ぼつぼつ」とはどれぐらいの時間か、決して3分後か、5分後かという形だけのものではないし、辞書に書かれている「少しずつ」という意味でもない。この場合の「ぼつぼつ」は相手の状況、自分の状況、それからあたりの状況などを考慮して適当な時間にとという日本人の心が入っている。字面のままの日本語の意味だけを教えると、言わない日本語、役立たない日本語になる恐れがある。その言葉の心を教えると、真の日本語、日本語らしい日本語になる。中国の日本語学科のある大学では、ほとんど4年間の修学年限なので、前の2年間では、普通、基礎日本語を教える。語彙や、慣用語、文法にまで、日本人のものの考え方、発想法が入っているので、その場その場で教えると、形だけで、無味乾燥なものから、肉付きで、感情や表情のこもった生きたものになる。だが、文化的背景など説明するとき、なるべく簡潔で、そして一番肝心なところだけでいい。ちょっとだけですぐ分かってくれる程度で一番理想的である。決してだらだらと長くなってはならない。頭の中に、あくまで時間が限られていて、主な時間は言

葉の練習などに力を入れるべきだということを置くべきである。絶対に本末を転倒させてはならない。あとの2年間は、日本文学や翻訳、通訳、または作文などを習うので、もっと日本文化とその文化的背景に気を付け、把握すべきだと思う。要するに、日本文化の教育を日本語教育に導入すべきだが、具体的にどう導入するかが重要である。有形文化も習う必要があるが、目に見えない日本人の発想法や心などの無形文化を習うこと、そして、最も日常的なものから、日本人の行動様式、衣食住、礼儀作法、躰、交際術などを表わす言葉とその言葉の含まれている文化と文化的背景から日本語を学ぶのが一番大事である。就職のために日本語を習う人が多いので、日本の企業文化——前にあげたビジネス電話も企業文化に入るが、企業精神の入った企業文化を習い、身につける必要があると思う。

## 注

①5W1H / WHAT, WHO, WHEN, WHY, WHERE ; HOW

## 参照資料

- |           |                        |       |
|-----------|------------------------|-------|
| 金田一春彦     | 《日本語》(上・下)(1975年発行)    | 岩波新書  |
| 大森和夫ら編著   | 《日本語》(上)(1998年発行)      | 大連出版社 |
| 長崎福三      | 《肉食文化と魚食文化》(1998年発行)   | 農文協   |
| 霞山会       | 《日本展望》(1999年8号)        |       |
| 佐藤洋子      | 《日本語教育における文化接触の問題》     |       |
|           | 『講座・日本語教育23』           |       |
| 中国日語教学研究会 | 《世紀の日語教育》(21)(1998年発行) |       |